

飼料問題の追究

田垣住雄

畜産振興、多頭飼育などで飼料問題が抬頭し、自給飼料の増産があまりはかばかしく進み難いため、購買飼料の依存度が高まつて、最近では需給のアンバランスにより飼料価格が暴騰してきたが、また一面では養鶏、養豚などのきわめて多頭飼育が勃興し、飼料基盤のない集団畜産業が推進せられるにつれ、これに伴つて飼料屋が雨後の筍のようにふえてきた。

自給飼料源の増産によつて畜産主軸の農業転換を企図している矢先に、このような購買飼料主軸の畜産が先進しだしたことは、農政推進上から見て看過できない飼料問題を提示している。

三十四年二千戸の代表農家について農林省が調査した飼料需給の実態を見ると、第一表のようになつてゐる。

これによると粗飼料は自給率が高いが、濃厚飼料は役肉牛を除いて購買率が高い。消化養分総量では鶏の購買率が最高で、つきが豚である。

第一表 一年一頭の飼料需給の実態

鶏	豚	役肉牛	乳牛	粗飼料			濃厚飼料			消化養分総量		
				購入	自給	購入	自給	購入	自給	購入	自給	
八六%	二一%	一五%	三三%	三三%	二一%	六六%	三三%	六六%	三三%	六六%	三三%	
(九四kg)	(一、五kg)	(四、六kg)	(三、四kg)	(一、三kg)	(二、九kg)	(三、八kg)	(三、八kg)	(三、八kg)	(二、六kg)	(二、六kg)	(二、六kg)	
六六%	三三%	三三%	三三%	三三%	三三%	三三%	三三%	三三%	三三%	三三%	三三%	
(九四kg)	(一、五kg)	(四、六kg)	(三、四kg)	(一、三kg)	(二、九kg)	(三、八kg)	(三、八kg)	(三、八kg)	(二、六kg)	(二、六kg)	(二、六kg)	

そこで、この調査に基づく経済関係を見ると、第二表のとおりである。

消化養分総量の購買率最低の役肉牛がその支払率も最低であつて、これと反対に購買率の高い鶏がその支払率も最高である。これは当然なことであるが、養鶏では販売総額の約半分を購入飼料に依存している。これは一昨年の実態で、この調査では鶏だけに現われているが、乳牛や豚にも最近ではその傾向が起つてゐる。

近年盛んにやれ多数飼育だ、やれケージ飼育だといつてゐる矢先に、国外からの輸入飼料の増加や、国内の移出入飼料の工面や、加工飼料、混合飼料の工夫などが盛んになつて飼料プームを巻き起し、麩の値段が小麦の値段より高いというような奇現象さえ示しているが、これは果して農業革新政策への動向だろうか？収入の半分近くを購入飼料に投入することでは飼育専門家も苦しい立場になるし農家ではたとえ多数飼育になつても、割合利益をあげ難いのであるまいか。

第二表 販売額と飼料購入代

鶏	豚	役肉牛	乳牛	販売総額	飼料購入代	支払比率
一七二	三、五九	五、七六	一〇、三三	一〇、三三	三、七二	三六%
九三	二、〇〇	三、七二	二、〇〇	九三	三、二一	三三%
					五、三	五七%

瑞穂農業が黄河文化の流れを汲んで穀菽農業に発展した今日では、豚鶏など伸びやすい実情を持つてゐるから、いざ増産となると副産物主食で間に合うものが、たやすく伸びるように考へて、牧草など飼料作の自給力増進によつて草食家畜の増産を図るよりも、非草食家畜の増殖が期待されるから、乳肉卵の長期増産上でも、その計画内容を見ると、割合に草食家畜に低く非草食家畜に高い期待がかけられ、粗飼料の改善とその自給率の向上よりも、濃厚飼料に偏した動向が窺われるので、

牧草と園芸 九月号 目次

- ◇表紙写真 朝日を浴びて放牧地へ向う牛群 (北海道新聞社提供)
- ◇飼料問題の追究……………田垣住雄…三
- ◇秋播き青刈作物の新品種……………兼子達夫…六
- ◇飼料用根菜類の作り方……………安孫子六郎…二〇
- ◇茶園門作として栽培されている飼料作物(2)……………水島隆…三
- ◇カーフミールとその正しい使い方……………奥村実義…七
- ◇秋植球根の種類と植え方……………奥村実義…七

飼料問題もまたこの傾向で、濃厚飼料を重点にして輸入飼料、移入飼料などの販売飼料プームを起してきたのであろうが、この畜産振興は農家の自立推進、経済成長の真諦にはなり難い。

経営内容が改変せられて、飼料基地開拓や飼料作が進み、最も経済的な飼料作として牧草、その他が増産されてくると、このような生産性の優れた農家地帯によつて、市場価格が決められるようになるであらう。

今どこぞ購買飼料率の高い生産でもどうにかやつてゆけるだろうが、だんだん自給飼料率の高い生産が勃興すると、割高な購買飼料を多給したのでは、やつてゆけなくなると思ふ。

飼料作も飼料基地造成も思うようにでき

ないため、やむをえず購買飼料を多用することになるわけだが、自給飼料ほどの安さで購入するとしたら、安い飼料には消化養分量も少ないから、飼育の方も思うようにできなくなる。

前に示した調査では、牛乳を例にとると、粗飼料一、七四二キタと濃厚飼料一、九三三キタで、乳その他販売額一〇六、七三二円（泌乳量四、四二五キタ）になっているが、自給飼料主軸になると、これくらいの泌乳量なら牧草二、三キタくらいで可能であるから、反収四八キタとして三六反歩の生産額になる。府県の暖い地方なら反収一五二〇キタになるから、一・五二反であげられることになる。そうなるで購入するのは自給できないほんの一部になって、支払額がきわめて少なくなり、その上保健状態もよくなるので無駄な支出も減じ、反当の販売額が向上する。（第三表）

米作が反収効果の最高ではなく、多毛作的な優良園芸作の方が都市に近いほど高度の反収（年収）をあげているが、まず一般的には米作主軸で成果をあげているから、これと牧草作乳産とを較べてみると、反収販売額が表示したような関係になって、自給飼料作の反収効果が進むほど、高度な米作に匹敵する成果をあげ得るし、また牧草作が導入されるほど、その根系作用によって土壌が改善せられ、有機自給肥料を増すので、土壌組織が良好し、化学肥料効果が顕著になって、購買肥料を著しく節約できるようになる。購買飼料でも飼育を増すほど堆厩肥を増加するが、牧草作の跡地効果

第三表 自給飼料による反当販売額

乳牛一頭所要反別	六反		五反		四反		三反		二反	
	販売額	反収	販売額	反収	販売額	反収	販売額	反収	販売額	反収
米産比較	一、六〇〇	一、四〇〇	一、五〇〇	一、三〇〇	一、四〇〇	一、二〇〇	一、三〇〇	一、一〇〇	一、二〇〇	一、〇〇〇
販売額	一、六〇〇	一、四〇〇	一、五〇〇	一、三〇〇	一、四〇〇	一、二〇〇	一、三〇〇	一、一〇〇	一、二〇〇	一、〇〇〇
反収	一、六〇〇	一、四〇〇	一、五〇〇	一、三〇〇	一、四〇〇	一、二〇〇	一、三〇〇	一、一〇〇	一、二〇〇	一、〇〇〇

備考 米価は一石二万円と仮定

のような土壌改善が伴わぬので、自給飼料での飼育成果には及ばない。

麦類、玉蜀黍など雑穀類では、実取り反収二万円以上は困難であるし、労働時間でも実取りでは反当一三〇〇〜一八〇〇時間を要し、青刈にしても六〇〇〜一〇〇〇時間を要するが、牧草では二〇〇〜三〇〇時間で足りるし、生産費でも牧草がもつとも安上りなことは、世界中で認められていることであるし、飼料効果だけでなく農業効果として牧草作そのものが成果を認められている。

三十四年全国七七〇戸の酪農家生産調査では、全国平均の第二次生産費（副産利用値差引額）が、乳一〇〇キタ当たり二、九四六円で、その販売乳価が二、四三四円にあって、五二二円の赤字である。そして一四頭飼までが赤字で五頭飼以上が僅かに黒字になっている。これを三十三年に較べると生産費が全国平均で一三〇円減縮しているから、その赤字も減じているが、これは自給飼料の生産が幾分進んだものとみられている。

飼料の需給関係を濃厚飼料についてみると、三一〜三二年の需給量が五一六万トで輸入量一五％であったが、三五年には需給量が八〇〇万トに膨大し輸入量が四〇％に

なつた。すなわち約三〇〇万ト、価格約二億に達する輸入量になつて、農産

物総輸出収益約五億の半分に近い喰いこみである。これだけの喰いこみが年々外国に持つてゆかれていくから、貿易の自由化によつて飼料輸入の自由化や飼料関税引下げ措置などが行なわれると、ますます輸入先上りの傾向が起つて、畜産の喰いこみが増大する。

欧州も昔は麦類を主軸にした農業であつたが、アメリカ開発につれて安い麦類が穀倉的役割をするようになってから、麦作を飼料作に転換する動機を生じて今日の状態に進んだのであるが、わが国でも米麦作主軸から欧州同様に飼料作に転進する運命がきたようである。

現状では農作も養畜もこのままでは打開できないから、高い穀類を作るよりも安い穀類を輸入した方がよく、とくに大陸の大豆、アメリカの玉蜀黍、麦類とは競争できないから、これらが他力依存になる傾向が強く、そしてこれらの作付に換えて牧草作を主とする飼料作が進められる傾向が起つてきた。

最近来朝したドイツのクリューガー博士は、わが国の状況を二カ月ばかり視察した結果、日本畜産では外国種の輸入依存から

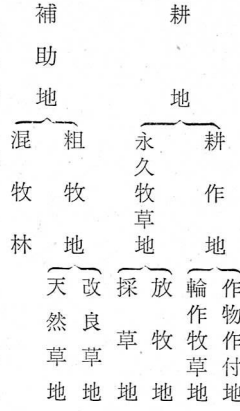
日本独自の育種選択に進んで家畜のレベルを上げること、飼料作物栽培、草地開発を進めて飼料の自給を積極化する必要があると所見を開陳しているが、これはすでにわが国でも先覚者達が主張しているのだから、それを一層裏書きされたものともみることが出来る。ドイツその他欧米では生れた牝牛の大部を淘汰して肉用とし、選択牝牛だけを繁殖用（搾乳用）としているのに、生れた牝牛全部を搾乳用に行っているわが国では独自の選択淘汰が全く行なわれないから、いつまでたつても乳牛のレベルが上らないし、飼料作（牧草作）を軽視しているの、その栽培も進まず草地開発も進展しないから、たとえ濃厚飼料を輸入しても、健康飼育、能力向上、経済成長などがはかばかしく進歩しないといつては可なりである。

鶏豚は別として飼料の主軸は何といつても牧草であつて、よい牧草によつて健康な高能率家畜ができれば、畜産主軸の農業では、牧草作が耕地にも草地にも進まなければならぬ。そして輸入に依存できるのは濃厚飼料であつて、これは主飼料でなく牧草の不足を補うか、あるいは草質不良を補うか、いずれにせよ補助的なものであるから、これは国産よりも外国産に安いいいものがあれば流用すべき性格のものであるが、これが多頭飼育とか畜産振興とか農業革新とかの役割で、主役的な立場を持つものではない。

欧州には牧草さえ輸入しているところもあるが、そんなことは例外であつて、北欧では土地のよいところにも牧草作を進め、

また悪いところも改良して草産を進めてい
るし、傾斜地から山腹、山腹から高原にま
で草作的な営農を進め、麦の連作や豆の連
作などはすべて牧草との輪作に進み、瘠地
改良には草作による生物学的土地改良法を
進めて農用地を拡張し、畜産を高度化した
農業形態を推進している。だから農用地と
いうときのよ様な土地を包含している。

農用地



畜産主軸の農業では、このような農用地
経営が勃興するのであつて、農業の近代化
は機械動力によつて開発営農共に広大な面
を取り入れ、作物作付地の営農から牧草作
付地の営農に発展し、穀実作による気象地
勢の限界を越えて拡張し、穀実作の限界を
越えて深層を活用し、農業経営力を著しく
増大するとともに、畜産の再生産によつて澱
粉主軸の生産から蛋白、脂肪主軸の生産に
進み、食糧生産を高級化するのである。

多頭飼育というようなことは、何も役人
や指導者がやかましくいわなくても、飼料
生産がふえて多頭飼育のよくなれば、利
益を打算する農家が自然に多頭飼育に発展
するのが当然であつて、根本は多く飼えば
それだけ利があると思つても、それができ

ないところに問題があるのだから、いまさ
らこと新しく多頭飼育多頭飼育と新知識の
ように宣伝しなくとも、多頭飼育のやれる
よ様な農業の基本問題を解決して、その政
策を根強く進めることが根底である。

ここで飼料業界に希望したい。畜産
振興と飼料業者とは深い関係があるが、飼
料業者といえども、農家の養畜成果があつ
て経済が成長しないかぎり、永遠な発展は
望み難いのであるから、はなはだ平凡では
あるが信用第一に取引するよう心掛けてい
ただきたい。飼料の質については家畜、家
第四表 飼料需給の予想
(当事者調、澱粉価試算)

粗飼料自給率	供給区分					濃厚飼料	需要量	供給量
	家畜飼料全体の比	草食家畜だけの比	乳牛だけの率	飼料				
				粗飼料	副産物			
三五%	三三%	三六%	五	八	五	五	七五万ト	四五五年
四五%	四五%	五〇%	五	七	五	一	一六六万ト	四五五年

禽が正直にその成果を現わすので、たとえ
需要が多く原料が乏しいときでも、良心的
な優良飼料を供給することが肝要である。
また現在は畜産ブームで需要が先回つてい
るが、いずれ飼料作や飼料基地の造成が進
むにつれて、緩和してくることを前提とし

て、無暗に行き過ぎた企業をしないように
したいものである。さらにわが国は海産に
富んでいるから、この方面の未利用物質の
蒐集活用が一つの着想であつて、海水中に
はすべての陸地成分が流れ込んでい
るから、これを飼料に取り入れる工夫が望ま
しい。そうすると農産物も畜産物も欠陥の少
ない食糧生産が進み、貢献するところが大
きいであろう。

なお飼料需給の将来の見透しとしては、
第四表のように予想試算されている。

牧草一三倍、飼料作物四〜五倍に増産が
進み、乳牛の粗飼料自給率二一%、草食家畜
の粗飼料自給率一七%を増すが、全体とし
ての粗飼料自給率は僅か二%増すといど
で、濃厚飼料が澱粉価総体の六〇%内外を
しめる点ではあまり変化がない。昨三五年
澱粉価五〇〇万トの需要に対し四〇%の澱
粉価二〇〇万ト(二億ト)を輸入している
から、自給伸びがないとき四十五年ころの
澱粉価一、二(〇〇万ト)の需要に対しては澱
粉価九〇〇万ト(九億ト)、七五%に達する
高度な輸入になるので、農産物輸出総額(五
億ト)がふえないかぎり、その総額の約二
倍まで喰つてしまうことになる。

選択的拡大方針で、麦作その他に牧草作
が進出することによつて、粗飼料の質的向
上と自給率増大とをもちたすが、これだけ
では濃厚飼料の自給力が伸び難い。そこ
で、草地開発を極力推進して、草飼料増産
と粗飼料の質的向上に加えて、土地生産能
力の向上をめざし、長期牧草輪作地の造成
を企図し、準畑地から畑地への拡充によつ

て畑作振興を推進することが、濃厚飼料自
給率をも併進する政策として、きわめて重
要な役割を持つている。

しかしわが国の現状では、このような飼
料基盤の拡充を急激に促進し難いから、総
体の自給力を伸ばすためには相当の年代が
かかるが、それが基本なのであるから、そ
の飼料生産の進度を無視して、無暗に家畜
数だけを増すことには無理が伴なうし、健
全な畜産主軸農業の転進を阻害するおそれ
がある。

飼料問題は畜産上の最も重要な問題であ
るが、とくに畜産振興が農業自体の経営改
善、経済成長を目的とする現段階では、農
政上最も重要な課題になつている点に、畜
産行政を越えて農業行政としての一躍進が
期待されるゆえんである。従来のような飼
料生産を軽視した穀救農業の因習を打ち切
つて、直接食料作から間接食料作(牧草作)
への比重を高め、食料生産としての高級化
と、広汎な有機生産への高度化とによつて、
農業経営力を増強し、基盤の拡張と技術の
振興によつて経営体制を順当に改進して生
産資源を充実し、経済の波を打ち越えて経
済成長への道を進め、自立体制を整えるの
が眼目であるから、安易な他力依存的な打
算の手段は当面の方便として過渡期の対策
であるとしても、そのため永遠な基本的飼
料政策の推進を妨げるほどに過激すること
は、警戒、警告すべき問題である。

(札幌市在住、草地農業研究家)